

Otfrid の福音書における“主文の現在形 +副文の接続法過去形”の形式について

齋藤 治之

韻文によって書かれた作品を語学的に研究する場合、研究者は、ある言語形式が、韻律の影響を受けているかどうかということを常に念頭に置かなければならない。そのことは、本稿で扱う、9世紀後半古高ドイツ語のラインフランク方言で書かれた Otfrid (オットフリート) の福音書にもあてはまる。

その一例として、Otfrid の福音書には、次のような文が存在する。

Firnim in alawari, /thaz got ther fater *wari*,⁽¹⁾

joh thaz kind eino/kristan *bizeino* (Ⅱ. 9, 75)

(実際、神がその父であり、その子供はただキリストのみを示している、ということを理解しなさい。)

上の文では、主文の *firnim* という現在命令形に対して、それに続く副文では、一行目に接続法過去形 *wari* が、二行目に接続法現在形 *bizeino* が現われるが、このような場合、接続法過去形 *wari* は、脚韻 *alawari: wari* の影響によるものなのか、あるいは、過去時称としての意味を持っているのであろうか？

本稿では、Otfrid の福音書に現われる、主文の現在形に対する副文の接続法過去形という形式をすべて網羅することによって、これまであまり組織的に扱われることのなかったこの問題について考えてみたいと思う。

本論に入る前に、本論とも関連するが、Otfrid における“主文の現在形+副文の接続法過去形”に関するこれまでの解釈について述べてみたい。

Otfrid における上述の形式の解釈に関しては、大きく分けて、次の二通りの考え方が存在する。

Otfrid の福音書における“主文の現在形+副文の接続法過去形”の形式について

①どうしても韻律の影響によるとしか考えられない場合を除いて、接続法過去形の使用を必然的なものにとらえ、その意味を忠実に解釈する。

②ある場合には接続法過去形の使用は韻律上止むを得ないもので、そのような場合、接続法過去形は、意味的には、他の時称あるいは他の法、つまり、接続法現在形・直説法過去形直説法現在形のどれか一つと同じである。

①のような考え方の代表者である Erdmann は、例えば、“/thaz ist thaz arunti min, thaz ih iu *gizalti*, /waz er hera wolti. (I. 27, 54) (彼がこの世に向かって何を望んだかということをおあなた方に語ることが、しかしながら私の役目である。)”という文の接続法過去形 *gizalti* を、語る行為が現在から未来にかけて行なわれるにもかかわらず、語ることの命令を受けたのが過去の時点であるという理由から、必然的なものであると解釈するに至っている⁽²⁾。

②の考え方の代表者である Behaghel によれば、主文の過去形+副文の接続法過去形、主文の現在形+副文の接続法過去形のような、副文に接続法過去形が現われる形式においては、本来、過去時称としての意味を持たない接続法過去形は、副文に現われる接続法現在形との類推によって直説法過去形より生じたものであり⁽³⁾、上述の文について言えば、*thaz ih iu gizalti* の基にある文は *ih gizalta* (直説法過去形) *iu* となり、この文を過去の出来事として解釈せざるを得なくなる。そこで、Behaghel の考えに従えば、接続法過去形 *gizalti* は、彼も指摘しているように⁽⁴⁾、韻律の影響 (*gizalti: wolti*) によって止むを得ず現われたものと考えねばならない。

Otfrid における韻律と言語形式の関係を数十年ぶりに再び取り上げた Nemitz の説は、②の考え方をさらに一歩進めるものである。彼は、ラテン文法家 Donatus と Pompeius の次のような詩学上の概念、つまり、*barbarismus* (語形上の誤り) —— *metaplasmus* ((韻律上の必要から許される) 語形変異), *solocismus* (文法上の誤り) —— *schema* ((韻律上の必要から許される) 文法上の誤り) を Otfrid の福音書にあてはめ、そこに現われる語形的・文法的に違反した種々の語を *metaplasmus*, *schema* に分類して、ラテン文法・詩学によく通じていた

Otfrid の福音書における“主文の現在形+副文の接続法過去形”の形式について Otfrid が、それらの語を韻律上の必要から意図的に、言い換えれば、詩的な自由 (poetische Lizenzen) として用いていると述べている⁽⁵⁾。しかし本稿で問題としている接続法過去形に関しては、彼は7例 (I. 1, 21f.; I. 1, 113-116; I. 27, 37f.; II. 13, 27f.; III. 3, 1, III. 6, 11f.; III. 17, 17f.) を schema として引用しているにすぎない。

さて、Otfrid の福音書には、主文の現在形+副文の接続法過去形に関して以下のような用例が存在するが、それらは、主文の動詞の種類⁽⁶⁾、あるいは副文の種類によって、次のようなグループに分類することができる。

〔主文の動詞〕

I. 1) wânen “思う” (用例: I. 11, 34; I. 27, 11; I. 27, 21; II. 4, 36; II. 4, 38; II. 7, 58; II. 12, 3; II. 18, 1; III. 11, 10; III. 21, 11; IV. 4, 60; IV. 18, 5; IV. 22, 3; IV. 26, 6; V. 4, 11; V. 10, 15; V. 20, 83)

- ① ni wanu, si ouh thes *thahti*, /thaz siu sia thara brahti ; (III. 11, 10)
 (彼女がまた、自分の娘をそこへ連れて来ようと考えたとは、私は思わない。)
 (類例: I. I. 11, 34; I. 27, 11; I. 27, 21; II. 4, 36; II. 4, 38;
 II. 7, 58; II. 12, 3; III. 11, 10; III. 21, 11; IV. 4, 60; IV. 18, 5; IV.
 22, 3; IV. 26, 6; V. 4, 11; V. 10, 15)

①に属する文は、主文に ih wân(u) “私は思う” という、Otfrid 自身を主語にした文が現われ、内容的にはすべて、過去の出来事 (聖書の内容) に対する Otfrid の感想を述べたものである。

また、“Ih wan, er therero dato *hintarquami* thrato, (II. 12, 3) (彼がこれらのことに非常に驚いたと、私は思う。)” (類例: II. 7, 58; IV. 18, 5) のような、脚韻の位置にない接続法過去形が例存在する。これらのことから、①に属する文の接続法過去形はすべて、脚韻のために現われたものではなく、過去時称

Otfrid の福音書における“主文の現在形+副文の接続法過去形”の形式についての意味⁽⁷⁾を持つと考えられる。

- ② Ni wanet, thaz gizami,/thaz ih zi thiu *quami*, ih mih in thiu rachi,
then wizzod firbrachi (Ⅱ. 18, 1)

(私が荒々しく律法を破るためにやって来たことが(何か)ふさわしいと、あなた方は思わないように。)(類例:Ⅳ. 2, 11)

Ⅱ. 18, 1 に対しては, Heliand の “Ni uuâniat gi thes mit uuihtiu, that ic bi thiu an thesa uuerold *quâmi*, that ic thana aldan êu irrien uillie (1420) (私が古い律法を破るためにこの世にやって来たとき、あなた方は少しも思っていない!)”, あるいはゴート語の “ni hugjaiþ ei *qemjau* gatairan witop (Mt.⁽⁸⁾ 5, 17) (私が律法を破るためにやって来たとき、あなた方は思わないように!)” のような、接続法過去形に関するはっきりした対応があり, *quami* は明らかに過去時称の意味を持つと考えられる。

Ⅳ. 2, 11 はⅡ. 18, 1 と構文的に同じであり, Ⅱ. 18, 1 と同様のことが言える。

- ③ Wanent sie bi notin,/thaz wir then urheiz *datin*, joh wir thes biginnen,
thaz widar in ringen (Ⅲ. 25, 19)

(我々が反乱を起こし、彼らに対して戦い始めると、彼らは当然思うだろう。)

Ⅲ. 25, 19・, J. 11, 48に対する Otfrid の挿入⁽⁹⁾であり, 聖書に対応を見出すことはできないが, 内容的には未来の事柄を表わしており, また, 二行目に接続法現在形 *biginnen* が現われることから, 一行目の接続法過去形は脚韻 (*notin* : *datin*) の影響によって接続法現在形の代わりに現われたと考えられる。

- ④ /wer mag wanen, druhtin, thes, thaz man io in alagahi/thih sulihan

Otfrid の福音書における“主文の現在形+副文の接続法過去形”の形式について

gisahi; (V. 20, 83)

(そのようなあなたを見たとき、主よ！、誰が思いあたりましょうか?)

V. 20, 83には、聖書の対応“domine, quando *vidimus* te hospitem (Mt. 25, 37) (主よ！ 我々はいつ客であるあなたを見ましたか?)”が存在し、接続法過去形 *gisahi* は過去時称の意味を持つと考えられる。

2) *frâgên* “尋ねる” (用例: III. 14, 34)

① *Thih thringit man bi manne./in thesemo selben gange, alle these liuti;/thu frages, wer thih ruarti?* (III. 14, 34)

(これらの人々が、この行列の中で、次から行へとあなたを押しています。

(それなのに) あなたは、誰があなたに触れたか、尋ねるのですか?)

III. 14, 34には、聖書の対応“et dicis: quis me *titigit?* (L. 8, 45) (そしてあなたは、“誰が私に触れたのか?”という。)があり、接続法過去形 *ruarti* は過去時称の意味を持つと考えられる。

3) *lernên*⁽¹⁰⁾ “学ぶ” (用例: III. 19, 11)

① *Lerne hiar thia guati,/wio unser druhtin dati* (III. 79, 11)

((人は)ここで、我々の主が、すばらしくも、いかにふるまったかを学ぶように!)

III. 19, 11は、過去の出来事(聖書の内容)に基づいて、Otfridが読者に対して呼びかけた文であり、後半行は過去の事柄に係わっていることから、接続法過去形 *dati* は過去時称の意味を持つと考えられる。

4) *wizzan* “知っている” (用例: II. 12, 8; III. 16, 60)

Otfrid の福音書における“主文の現在形+副文の接続法過去形”の形式について

① *wir wizun thaz gizami, /thaz thu fon gote quami*; (Ⅱ. 12, 8)

(我々はあなたが、ふさわしくも、神からやって来たという事を知っています。)

Ⅱ. 12, 8には、聖書の対応“*scimus, quia a deo venisti magister* (J. 3, 2) (我々は、あなたが神からやって来た師であることを、知っています。)”が存在し、接続法過去形 *quami* は過去時称の意味を持つと考えられる。

しかし、動詞の法の観点からは、接続法の現われる理由はなく、接続法過去形は脚韻 (*gizami: quami*) の影響によって、直説法過去形の代りに現われたと考えられる。

② *Thanne uns krist quimit heim, /ni weiz iz manno nihein, thes kunnes gizami, /wanana er selbo quami*. (Ⅲ. 16, 60)

(キリストがこの世にやって来る時、どこから彼自身が来るかということ、人々のうち誰も知らない。)

Ⅲ. 16, 60には、聖書の対応“*nemo scit, unde sit*. (J. 7, 27) (彼がどこから来るのか誰も知らない。)”が存在し、接続法過去形 *quami* は接続法現在形 *sit* に対応している。また、*wanana* 以下は明らかに未来の事柄に係わっている。これらのことから、接続法過去形は脚韻 (*gizami: quami*) の影響によって現われたと考えられる。

5) *refsen* “とがめる” (用例: V. 21, 4)

① *Ni refsit er sie thrato/iro firndato, suntar ziu se irgazin, /sin thionost so firliazin*. (V. 21, 4)

(彼は、彼らの悪行のためではなく、どうして彼への勤めを忘れ怠ったのかをとがめる。)

Otfrid の福音書における“主文の現在形+副文の接続法過去形”の形式について

V. 21, 3 には、聖書の対応はないが、V. 21, 3 は最後の審判に関するものであり、人々の過去の行ないに対する神の叱責が問題になっており、接続法過去形 *irgazin*, *firliazin* は過去時称の意味を持つと考えられる。

II. 6) *findan* “見出す” (用例: III. 20, 156; IV. 35, 12)

① /*ni findet ir in war min fon êristera worolti/ther er io sulih worahti!*

(III. 20, 159)

(世界が始まって以来、誰かが以前そのようなことを行なったということを、あなた方は実際見出すことはないであろう。)(類例: IV. 35, 12)

III. 20, 156 には、厳密ではないが、聖書の対応 “*a saeculo non est auditum, quia quis aperuit oculos caeco nato. (J. 9, 32)* (誰かが盲人として生まれた者の目を開いたということは、世界が始まって以来聞かれていない。)” が存在し、接続法過去形 *worahti* は過去時称の意味を持つと考えられる⁽¹¹⁾。IV. 35, 12 は、III. 20, 156 と構文的に全く同じであり、III. 20, 156 と同様のことが言える。

7) *gouma neman* “注意を払う” (用例: (II. 4, 41; H. 27)

① *Nim gouma, waz er wolti,/waz sulih beta skolti, waz kriste scolti thaz brot;/(II. 4, 41)*

(彼が何を望んでいたか、そのような願いがいったい何なのか、キリストにとっていったいそのパンは何であるのか、ということにあなたは注意しなさい!)

II. 4, 41 は、過去の出来事 (聖書の内容) に基づいて、Otfrid が読者に対して呼びかけた文であり、接続法過去形 *wolti* は過去時称の意味を持つと考えられる。しかし、動詞の法の観点から言えば、一行目・二行目の接続法過去形 *scolti* は非現実の意味を含んだ懷疑・反語の表現に用いられており、この位置に現われ

Otfrid の福音書における“主文の現在形+副文の接続法過去形”の形式について理由はあるが、一行目の *wolti* は接続法として現われる理由はない⁽¹²⁾。そこで、*wolti* は、脚韻 (*wolti: scolti*) の影響によって、直説法過去形 *wolta* の代わりに用いられたと考えられる。

- ② *Nim gouma in alathrati, /wio Abel dati, wior hugu rihta sinan/in selb druhtinan; (H. 27)*

(アベルがいかに振る舞ったか、彼がいかに自分の思いを主に向けたか、ということにあなたはよく注意を払いなさい。)

H. 27も上述のⅡ. 4, 41と同様の文であり、接続法過去形 *dati* は過去時称の意味を持つと考えられる。しかし、二行目には、直説法過去形 *rihta* が現われており、このことから *dati* は、脚韻 (*alathrati: dati*) の影響によって、直説法過去形 *deta* の代わりに用いられたと考えられる。

- 8) *firneman* “理解する” (Ⅱ. 9, 75)

- ① *Firnim in alawari, /thaz got ther fater wari, joh thaz kind einokristan bizeino; (Ⅱ. 9, 75)*

(実際、神がその父であり、その子供はただキリストのみを示している、ということを理解しなさい。)

Ⅱ. 9, 75では、一行目に接続法過去形 *wari*、二行目に接続法現在形 *bizeino* が現われるが、同じ時に起こった出来事の説明に関して、異なった時称が用いられることは奇妙である。また、副文の内容は、アブラハムとその子イサクをアレゴリー的に解釈したもので、時を超えた一般的な事柄を示している。そこで、接続法過去形 *wari* は、脚韻 (*alawari: wari*) の影響によって現われたと考えられる。

Otfrid の福音書における“主文の現在形+副文の接続法過去形”の形式について

9) *wis duan, mâri duan* “知らせる”

(用例: I. 19, 23; II. 13, 28; III. 20, 55; IV. 19, 50; V. 7, 49)

① *This buah duent thar mari, /theiz sambazdag tho wari*, (III. 20, 55)

(聖書はそこで、それが安息日であったことを知らせている。)(類例: I. 19, 23)

III. 20, 55には、厳密ではないが、聖書の対応“*erat autem sabbatum, quando lutum fecit Jesus et aperuit oculos ejus. (J, 9. 14)* (イエスがどろをつくって彼の目を開けたのは、安息日であった。)”が存在し、接続法過去形 *wari* は過去時称の意味を持つと考えられる。しかし、動詞の法の観点からは、接続法の現われる理由はなく、接続法過去形は脚韻 (*mari: wari*) の影響によって、直説法過去形の代りに現われたと考えられる。

I. 19, 23には、聖書の対応はないが、構文的に III. 20, 55と同様であり、I. 20, 55と同じことが言える。

② „*Fro min!* “*quad si, „dua mih wis, /oba thu nan namis, joh wara thiu thin guati/then minan liobon dati*; (V. 7, 49)

(“主よ!” 彼女は言った、“あなたが彼を運び去ったのかどうか、またあなたが私の愛する方をどこへ運んだのか知らせて下さい!”)

Thaz thu unsih nu gidua wis, /oba thu gotes sun sis, zi kriste er thih ginanti/jon hera in worolt santi! (IV. 19, 50)

(あなたが神の子であるかどうか、神があなたをキリストとして、この世に送ったのかどうか、あなたは我々に知らせなさい!)

V. 7, 49には、厳密ではないが聖書の対応“*dicto mihi, ubi posuisti eum;*

Otfrid の福音書における“主文の現在形+副文の接続法過去形”の形式について (J. 20, 15) (あなたが彼をどこへ置いたのか、私に言うように!)”が存在し、接続法過去形 *namis, dati* が過去時称の意味を持つことがわかる。

一方、Ⅳ. 19, 50には、一行目に聖書との対応 “*ut dicas nobis si tu es Christus filius dei. (Mt. 26, 63)*

(あなたが神の子キリストであるかどうか我々に言うように,)”が存在し、接続法現在形 *sis* は脚韻の影響によるものではなく、本来のものであることがわかるが、二行目には聖書との対応が存在しない。しかし、Heliand の “*ic unâniu, that ina ûs gegnungo god fon himila selbo sendi. (214)* (神自身が彼を我々に対して天から送ったと私は思う。)”との副文に関する類似性から、2行目の接続法過去形は、脚韻の影響によるものではなく、過去時称の意味を持つと考えられる。

③ *Thie thoh zi thiu gigahent. /gilouba sina intfahent : giduent sie lutmari, / thaz er io druhtin wari. (Ⅱ. 13, 28)*

(彼に対する信仰を受け入れることに努める者は、彼が主であるということを知らせる。)

Ⅱ. 13, 28には、聖書の対応 “*qui accepit ejus testimonium, signavit, quia deus verax est. (J. 3, 33)*

(彼のあかしを受け入れた者は、神がまことであることを知らせた。)”が存在し、“*quia deus verax est.*”からもわかるように、*thaz* 以下の副文は、時を超えた一般的な事実を示している。そこで、接続法過去形 *wari* は、脚韻 (*lutmari : wari*) の影響によって現われたと考えられる。

10) *lesan* “読む、読んで聞かせる”

(用例：Ⅰ. 20, 24; Ⅱ. 3, 11; Ⅳ6, 4; H. 44)

① *maht lesan, wio er dati/joh wio er se bredigoti*⁽¹³⁾ (Ⅳ. 6, 4)

Otfrid の福音書における“主文の現在形+副文の接続法過去形”の形式について
(彼がいかに行動したか、そして彼がいかに彼らに説教したかを、あなたは読むことができる。)(類例：Ⅱ．3，；H. 44)

Ⅳ．6，4は、過去の出来事(聖書の内容)に基づく、Otfrid の読者に対する呼びかけであり、wio 以下の副文は過去の事柄に係わっている。そこで、接続法過去形 *dati*, *bredigoti* は過去時称の意味を持つと考えられる。

Ⅱ．3，11；H. 44 はⅣ．6，4 と構文的に同じであり、Ⅳ．6，4 と同様のことが言える。

② /noh iz ni lesent scribara.

thaz jungera worolti/sulih mord *wurti*. (Ⅰ．20, 24)

(律法学者達もまた、若い人々のそのような虐殺が起こったことを読んで(報告して)いない。)

Ⅰ．20, 24は、Mt. 2, 16に対する Otfrid の挿入であり、thaz 以下の副文は過去の事柄に係わっている。そこで、接続法過去形 *wurti*は過去時称の意味を持つと考えられる。

11) scriban “書く”(用例：Ⅳ．27, 28)

① scrib, thaz er iz *quati*/joh sulih selbo *marti*.⁽¹⁴⁾ (Ⅳ．27, 28)

(彼がそのことを語った、そして、そのようなことを自ら知らせたと書きなさい!)

Ⅳ．27, 28には、厳密ではないが、聖書の対応“noli scribere : rex Judaeorum, sed quia ipse *dixit* : rex sum Judaeorum. (J. 19, 21)(ユダヤ人の王と書いてはいけない、そうではなく、自らユダヤ人の王と言った(と書きなさい)!)”が存在し、接続法過去形 *quati*, *marti* は過去時称の意味を持つと考えられる。

Otfrid の福音書における“主文の現在形+副文の接続法過去形”の形式について

Ⅲ. 12) *sagên* “言う” (用例: Ⅲ. 20, 44, Ⅲ. 20, 85, Ⅳ. 26, 19)

① *Sage uns nu giwaro, /wio sihist thu so zioro?*

joh wer thir dati thia maht, /(Ⅲ. 20, 44) (類例: Ⅲ. 20, 85)

(どうしてあなたはそのようにはっきりと目が見えるのか、そして誰があなたにその力及ぼしたのか、あなたは我々に本当に言いなさい!)

Ⅲ. 20, 44には、聖書の対応“*quomodo aperti sunt tibi oculi?* (J. 9, 10) (あなたの目はどのようにして開かれたのか?)”が存在し、しかも、*dati* が行中に位置している。そこで、接続法過去形 *dati* は過去時称の意味を持つと考えられる。

Ⅲ. 20, 85では、*dati* は脚韻の位置にあるが、Ⅲ. 20, 44と構文的に全く同じであり、Ⅲ. 20, 44と同じことが言える。

② *Ja saget man, thaz zi waru/sie scrigtin fon theru baru, /*(Ⅳ. 26, 19)

(死人達が棺台から飛び上がった、本当に言っている。)

Ⅳ. 26, 19には、聖書の対応は存在しないが、*scrigtin* が行中に位置することから、接続法過去形は過去時称の意味を持つと考えられる。

13) *quedan* “言う” (用例: Ⅱ. 14, 9; Ⅱ. 18, 11; Ⅱ. 23, 25; Ⅲ. 22, 3)

① *Ther evangelio thar quit, /theiz mohti wes an sexta zit; /*(Ⅱ. 14, 9)

(福音書はそこで、それが六番目の時であったと言っている。)(類例: Ⅲ. 22, 3)

Ⅱ. 14, 9には、聖書の対応“*hora erat quasi sexta.* (J. 4, 6) (時は六番目(正午)ごろであった。)”が存在し、また、接続法過去形 *mohti* が行中に位置している。そこで、*mohti* は過去時称の意味を持つと考えられる。

Otfrid の福音書における“主文の現在形+副文の接続法過去形”の形式について
Ⅲ. 22, 3 についても, Ⅱ. 14, 9 と全く同じことが言える。

- ② *Quit iogilih in thrati, /thaz er zeichan dati in mines namen namati, /*
(Ⅱ. 23, 25)

(誰もが, 自分は私の名前を唱えてわざを行なった, と熱心に言う。)

Ⅱ. 23, 25には, 厳密ではないが, 聖書の対応 “*nonne in nomine tuo..... virtutes multas fecimus? (Mt. 7, 22)* (我々はあなたの名において多くの良い行ないをしたではないですか?)” が存在し, *thaz* 以下の副文は過去の事柄に係わっていることがわかる。そこで, 接続法過去形 *dati* は過去時称の意味を持つと考えられる。

- ③ *Sie quedent, er giwuagi, /thaz man man ni sluagi; quit, got sih belge thrato/sulichero dato: (Ⅱ. 18, 11)*

(彼ら(あるいは聖書)は, 律法が, 人が人を殺さないように, と述べている, と言っている。(また律法は)神がそのような事をととても怒ると述べている。)

Ⅱ. 18, 11 の “*er giwuagi*” に関しては, “律法が述べた” と過去の意味に解釈することも可能である。しかし, 二行目に現在形 *quit* が現われることから, 語の一部でしか韻のふめない接続法現在形 *giwahine: glahe* の代りに, 語全体で韻をふむ (Vollreim) ために, 接続法過去形 (*gi*)*wuagi: sluagi* が用いられたと考える方がより妥当であると思われる。

そこで, *giwuagi* は脚韻 (*giwuagi: sluagi*) の影響によって現われたと考えられる。

14) *zellen* “語る” (用例: Ⅰ. 3, 16; Ⅱ. 9, 22; Ⅲ. 17, 18; Ⅳ. 36, 13)

- ① *Thio buah duent unsih wisi, /er kristes altano si, joh zellent uns ouh*

Otfrid の福音書における “主文の現在形+副文の接続法過去形” の形式について

mari, /sin sun sin fater wari: (I . 3, 16)

(聖書は我々に、彼 (アブラハム) がキリストの先祖であることを知らせ、また彼の子孫 (ダビデ) が彼 (キリスト) の先祖であることを知らせている。)

I . 3, 16では、一行目二行目において、それぞれ脚韻の位置 (*wisi: si; mari: wari*) に接続法現在形・接続法過去形が現われるが、二行目の “*sin sun sin fater wari*” は内容的に、時を超えた一般的な事柄を述べており、接続法過去形 *wari* は脚韻の影響によって現われたと考えられる。

② *Nu zeli uns avur follon/hiar then thinan willon, thaz thinaz girati, /waz iz theses quati; (III . 17, 18)*

(あなたはここで十分にあなたの思っていること、あなたの決定がこのことについて何を語るか言いなさい!)

III . 17, 18には、聖書の対応 “*tu ergo quid dicis?* (あなたは何を言いますか (J. 8, 5) (どう思いますか?))” が存在し、また、*Heliand* にも “*saga, huat thu is uillies. (3855)* (あなたがそのことに関して何を望んでいるのか言いなさい) のような対応が存在する。そこで、これらのことから、*waz* 以下の副文は明らかに現在の事柄に係わっていることがわかり、接続法過去形 *quati* は脚韻 (*girati: quati*) のために現われたと考えられる。

③ *So zellent sino guati, /thaz er fon tode irstuant, (IV . 36, 13)*

(そうすれば、彼の弟子達は、すばらしくも彼が死からよみがえったと言うでしょう。)

erzelist thu ouh thia guati, waz iagilicher dati: (II . 9, 22)

(またあなたが、それぞれの者がどんなすばらしいことをなしたか、を唱える

Otfrid の福音書における“主文の現在形+副文の接続法過去形”の形式について
ならば。)

Ⅳ. 36, 13には、聖書の対応“et dicant plebi: *surrexit* a mortuis; (Mt 27, 64) (そして彼らは民衆に、彼が死人達からよみがえったと言うであろう)”が存在し、接続法過去形 *irstuanti* は過去時称の意味を持つと考えられる。

Ⅱ. 9, 22には聖書の対応は存在しないが、構文的にⅣ. 39, 13と同じであり、また、文脈より副文の内容が過去の事柄に係わっていることがわかる。そこで、接続法過去形 *dati* は過去時称の意味を持つと考えられる。

15) *zihen* “申し立てる” (用例: Ⅳ. 21, 6)

① *Bistu zi thiu giwihit, /so thih ther liut zihit, in themo willen giangis, /thaz richi so bifiangis?* (Ⅳ. 21, 6)

(人々が、あなた国を奪い取ろうという意図で行動したと申し立てているように、あなたは王に任命されているのか?)

Ⅳ. 21, 6は、J. 18, 33に対する Otfrid の挿入で、聖書との対応は存在しない。

Ⅳ. 21, 6の接続法過去形 *giangis* に関しては、接続法現在形 (*gangês: bifâhês*) では語の一部でしか韻がふめず、そこで語全体で韻をふむ (Vollreim) ために *giangis: (bi)fiangis* が用いられたと考えることも可能であるが、Ⅳ. 21, 6は捕えられた後のイエスとピラトの対話が問題となっており、*giangis* は捕えられる以前の行動を表わしている。そこで接続法過去形 *giangis* は過去時称の意味を持つと考えられる。

[副文]

16) 時 (用例: Ⅲ. 18, 62)

① *ih bin mit giwurti/er, thanne er io wurti.* (Ⅲ. 18, 62)

(私は彼が誕生する以前から、喜びとともに存在している。)

Otfrid の福音書における“主文の現在形+副文の接続法過去形”の形式について

Ⅲ. 18, 62には、聖書の対応“antequam Abraham fieret, ego sum. (J. 8, 58) (アブラハムが生まれる前から、私は存在している。)”が存在し、ラテン語の文は、fietet からわかるように、“アブラハムの生まれる前に私は存在した、そして今も存在している。”という意味を持っている。そこで、Ⅲ. 18, 62の er, thanne 以下の副文は過去の事柄に係わっていることがわかり、接続法過去形 wurti は過去時称の意味を持つと考えられる。

17) 条件 (用例: H. 1)

- ① Oba ih thero buacho guati/hiar iawiht *missikerti*, *gikrumpti* thero redino,/thero quit ther evangelio: Thuruh kristes kruzi/bimide ih hiar thaz wizi, (H. 1)

(もし私が聖書のすばらしさに関して何か誤った解釈をしたり、福音書が語るその教えについて曲解したならば、キリストの十字架によって、私は罰を避けることができますように!)

H. 1は、Otfrid が St. Gallen の Hartmuat と Werinbert への献辞の冒頭において、完成した自己の福音書を振り返ったものであり、このような文脈より、oba 以下の副文は過去における非現実の仮定を表わしていることがわかる。

そこで、接続法過去形 *missikerti* は脚韻の影響によるものではないと考えられる。*gikrumpti* に関しては、この接続法過去形が脚韻の位置には立っていないことより、本来のものであることがわかる。

18) 譲歩 (用例: Ⅱ. 18, 22; Ⅲ. 3, 18; Ⅲ. 5, 15)

- ① Iz ist so giwisso,/thoh sie iz *abahotin* so, thoh iro muates herti/iz emmizigen *zurnti*. (Ⅲ. 5, 15)

(彼らはそれを誤って判断したが、彼らのかたくなな心はいつもそれに腹を

Otfrid の福音書における主文の“現在形＋副文の接続法過去形”の形式について

Ⅲ. 5, 15は、過去の出来事（聖書の内容）に基づいて、Otfrid が感想を述べたものであり、また、一行目では、*abahotin* は行中に位置している。そこで、接続法過去形 *abahotin*, *zurnti* は、脚韻の影響によるものではなく、過去時称の意味を持つと考えられる。

- ② *Yrhugis thar thoh eines man, /ther thir si irbolgan, thoh iz so luzil wari. /in muat thir er ni quami: Ni biut iz furdir thara mer; / (Ⅱ. 18, 22)*

(あなたがそこで、あなたに腹を立てている者を思い出すならば、それが非常に小さなもので、あなたの心にそれまで思いつかなかったとしても、供え物をそれ以上捧げるのをやめなさい。)

Ⅱ. 18, 22は、Mt. 5, 23に対する Otfrid の挿入であり、聖書との対応はないが、*in muat* 以下の結果文に過去を示す副詞 *êr* “以前に” が現われることから、その結果文に対応する主文の接続法過去形 *wari* は過去時称の意味を持つと考えられる。

- ③ *Ni bidrahtot unser sumilih, /thaz wir birun al gilih, einera giburti, / thoh iz sid sulih wurti; (Ⅲ. 3, 18)*

(我々のある者達は、それが後にそうなったのだが、我々が皆平等であり、一つの生まれから由来しているということを考慮しない。)

Ⅲ. 3, 18は、聖書の内容に関する Otfrid の道徳的 (*moraliter*) な解釈であり、聖書との対応は存在しない。しかし、Ⅲ. 3, 18の元になった Alcuin の J. 4, 53 に対する注釈には、“*superbia nostra retunditur, qui in hominibus non naturam, sed honores et divitias veneramur. increpata est ergo superbia nostra*, (人間において自然の性質ではなく名誉と富裕を尊重する我々の

Otfrid の福音書における主文の“現在形+副文の接続法過去形”の形式について傲慢さが抑えられている。従って、我々の傲慢さは(後に)広がったのである。)”のように、傲慢さが本来平等な人間を後に区別させるようになったということが述べられており、接続法過去形 *wurti* は過去時称の意味を持つと考えられる。

19) 目的 (用例: I. 1, 22; I. 27, 38; III. 6, 18)

① *Sie duent iz filu suazi, /joh mezent sie thie fuazi, thie lengi ioh thie kurti, /theiz gilustlichaz wurti.* (I. 1, 22)

(彼らはそれ(詩)をととても心地よいものとし、そして、彼らはそれが喜ばしいものになるように、長短の詩脚を計っている。)

I. 1, 22 の *theiz* 以下の副文は、文脈からも明らかなように、現在から未来にかけての事柄を表わしており、接続法過去形 *wurti* は脚韻 (*kurti: wurti*) の影響によって現われたと考えられる。

② *Thes gidua thu nu unsih wis, /wer thoh manno thu sis; thaz wir iz then gizaltin, /thie unsih hera santin.* (I. 27, 38)

(あなたは、我々を送った人々にそれを伝えるために、あなたがどのような人であるのか、我々に教えなさい。)

I. 27, 38には、聖書の対応 “*quis es? ut responsum demus his, qui miserunt nos.* (J. 1, 22) (あなたは誰ですか? 我々を送った人々に答えを与えるために質問に答えなさい。)” が存在し、使者達の派遣者に対する報告は、答えを得た後、つまり未来の事柄に属することがわかる。そこで、接続法過去形 *gizaltin* は脚韻 (*gizaltin: santin*)⁽¹⁵⁾ の影響によって現われたと考えられる。

③ *War mugun wir nu biginnan, /mit koufu brot giwinnan, thaz ther liut gisazi, /unz er hiar nu gazi?* (III. 6, 18)

Otfrid の福音書における“主文の現在形+副文の接続法過去形”の形式について
(人々がここで食べている間坐っているために、我々はどこでパンを買うことができるのか?)

Ⅲ. 6, 18には、厳密ではないが、聖書の対応“unde *ememus* panem, ut manducent hi? (J. 6, 5) (彼らが食べるために、我々はどこからパンを買おうか?)”が存在し、thaz 以下の副文が未来の事柄に係わっていることがわかる。そこで、接続法過去形 *gisazi* は脚韻 (*gisazi: gazi*) の影響⁽¹⁶⁾によって現われたと考えられる。

20) 様態 (用例: Ⅱ. 2, 37; Ⅲ. 3, 1)

① Ist sin guati ubar al,/so in kinde zeizemo scal, then fater einigan in not/drutlicho minnot; Follan gotes ensti,/selb so iz man *giwunsgti*,
(Ⅱ. 2, 37)

(彼のすばらしさは、父がたったひとりの、人がそれを望むようにそのままに、神の恩寵に満ちた者として心から愛するいとしい子供にふさわしく、あらゆるものにまさっている。)

接続詞 *selb so, sama so* “まるで~のように” は、接続法を伴い、その際、時の一致⁽¹⁷⁾が行なわれることが普通である。Otfrid の福音書では、V. 8, 31; V. 8, 43; V. 8, 53; V. 9, 15; V. 10, 3; V. 14, 15で、主文の過去形に続いて、*selb so* 以下で接続法過去形が現われている。Ⅱ. 2, 37では、主文は現在形で、しかも、*selb so* 以下が時を超えた一般的な事柄に係わっている。そこで、接続法過去形 *giwunsgti* は脚韻 (*ensti: giwunsgti*) の影響によって現われたと考えられる。

② Thiz ist uns ungizami,/so ih iz nu *firnam*i, noh ni quimit uns thiz *guat*/in unser armilichaz muat; (Ⅲ. 3, 1)

Otfrid の福音書における“主文の現在形+副文の接続法過去形”の形式について
(このことは、私が理解するところでは、我々の常識には反しているし、また、
我々の惨めな心にはこのすばらしい行ないは思いも寄らない。)

Ⅲ. 3, 1は、聖書の内容 (Mt. 8 章) に関する Otfrid の道徳的解釈で、聖書
との対応は存在しない。

接続詞 *so* の後には直説法が現われることが普通であり⁽¹⁸⁾、また、Ⅲ. 3, 1
の *so* 以下は、過去の意味で解釈することも可能であるが、“私が理解するよう
に、私の考えでは”のように現在の意味で時を超えた一般的な判断として解釈し
た方が良いと思われる。

そこで、接続法過去形は、脚韻 (*ungizami : firnami*) の影響によって、直説法
現在形の代りに現われたと考えられる。

21) 除外文 (用例: Ⅱ. 7, 90; Ⅳ. 26, 21; Ⅴ. 17, 35)

① *Meistar, sage mir in war, /wio bin ih thir kund sar, ni si nu in the-
reru gahi/mih er io ni gisahi?* (Ⅱ. 7, 60)

(先生、あなたは私を以前見たこともなく、どうして私を知っているのか、あ
りのままにおっしゃって下さい!)

Ⅱ. 7, 60は、J. 1, 48に対する Otfrid の挿入で、聖書との対応はないが、過
去を示す副詞 *êr* が存在することから、接続法過去形 *gisahi* は過去時称の意味
を持つと考えられる。

② *Nist guates wiht in worolti, /ni er untar uns hiar worahti;* (Ⅳ. 26,
21)

(彼がこの世で我々のもので行なったものを除いて、世の中にはいかなる救い
も存在しない。)

Otfrid の福音書における“主文の現在形+副文の接続法過去形”の形式について立てていたが、それ（イエスが主であるということ）は確かに本当である。）

Thoh nist nihein sterro, /ni er *ubarfuari* ferro;) V. 17, 35)

(彼が遠くへ通り越して行かなかった星はひとつもない。)

IV. 26, 21は、L. 23, 27に対する Otfrid の挿入で、聖書との対応はないが、イエスが十字架にかけられた後の人々の回想という文脈より、ni 以下の除外文が過去の事柄を述べていることは明らかである。そこで、接続法過去形 *worahti* は過去時称の意味を持つと考えられる。

V. 17, 35では、接続法過去形 *ubarfuari* が行中に現われることから、これも過去時称の意味を持つと考えられる。

22) 関係文 (用例 : S. 3; I. 6, 13; III. 24, 36; III. 26, 42; V. 19, 7; V. 20, 23; V. 20, 102; V. 25, 101)

① *Allo guati gidue, thio sin, /thio biscofa er thar habetin, ther inan zi thiu giladota, /in houbit sinaz zuivalta!* (S, 3)

(考えられ得る、彼の前の司教達がそこで享受した、あらゆるすばらしいことを、彼をその職に招いた者が、二倍にして彼の頭上にのせるように!)

Allo wihi in worolti, /thir gotes boto sageti, sie quement so gimeinit/ ubar thin houbit! (I. 6, 13)

(神の使者が告げた、世の中にあるあらゆる救いは、約束された通り、あなたのもとにやって来る。)(類例 : III. 26, 42)

I. 6, 13には、聖書の対応 “*perficientur ea, quae dicta sunt tibi a domino.* (L. 1, 45) (主からあなたに語られたものは成就されるであろう。)” が存在し、また S. 3 の *thio* 以下の関係文には過去を示す副詞 *êr* が現われることから、

Otfrid の福音書における“主文の現在形+副文の接続法過去形”の形式について
接続法過去形 *habetin, sageti* は共に過去時称の意味を持つと考えられる。

Ⅲ. 26, 42には聖書との対応は存在しないが、構文的に S. 3; I. 6, 13と同じであり、また、文脈より接続法過去形 *folgeti* は過去時称の意味を持つと考えられる。

② *Giloub ih thaz gimuato, /thaz thu bist krist ther guato, gotes sun gizami, /thu hera in worolt quami.* (Ⅲ. 24, 36)

(私は、あなたがこの世にやって来た慈悲深きキリスト、神のふさわしい息子である、と心から信じます。)(類例: V. 20, 102; V. 25; 101)

Ⅲ. 24, 36には、聖書の対応“*ego credidi, quia tu es Christus filius dei vivi, qui in hunc mundum venisti.* (J. 11, 27)

(私は、あなたがこの世にやって来た生きた神の息子、キリストであると信じました。)が存在し、接続法過去形 *quami* は過去時称の意味を持つと考えられる。

V. 20. 102; V. 25, 101には聖書との対応は存在しないが、文脈より、接続法過去形は過去時称の意味を持つと考えられる。

しかし、動詞の法の観点からは、上述の用例において接続法の現われる理由はなく、接続法過去形は、脚韻の影響によって、直説法過去形の代わりに現われたと考えられる⁽¹⁹⁾。

③ *Nist man, ther noh io wurti. /odo ouh si nu in giburti od ouh noh werde in alawar, /nub er sculi wesan thar;* (V. 20, 23)

(今まで生まれた者、あるいは今生きている者、あるいは実際これから生まれる者で、そこに行かないでよい者はいない。)(類例: V. 19, 7)

V. 20, 23では、*wurti·si·werde* によって、過去・現在・未来の三つの時の区分がなされており、接続法過去形 *wurti* は過去時称の意味を持つと考えられ

Otfrid の福音書における“主文の現在形+副文の接続法過去形”の形式について
る。

V. 19, 7 は, V 20, 23 と構文的に全く同じであり, 接続法過去形は過去時称
の意味を持つと考えられる。

23) nist, ther⁽²⁰⁾..... “～する者はいない”

(用例: I 9, 22; I 12, 10; I. 17, 1; I. 20, 12; I. 20, 15; II. 1,
37; IV. 4, 23; IV. 17, 7; V. 17, 17; V. 17, 20; V. 23, 19)

① ouh nist, ther er *gihorti*/so fronisg arunti. (I. 12, 10)

(かつてそのようにすばらしい知らせを聞いた者はいない。)(類例: V. 17,
17; V. 17, 20)

nist ther io in gahi/then jamar *gisahi*. (I. 20, 12)

(かつてそのような悲惨な光景を見た者はいない。)(類例: I. 20, 15; II.
1, 37)

①に属する文には, 関係文に過去を示す副詞 *êr*, *io* “かつて” が存在し, 関係
文において述べられている内容が過去の事柄に係わっていることがわかる。そこ
で, ①の接続法過去形は過去時称の意味を持つと考えられる。

② In thinemo kunne —/zel iz al bi manne, so nist, ther *gihogeti*,/thaz
io then namon habeti. (I. 9, 22)

((誰かが) かつてその名前を持っていたということを思い起こす(覚えてい
る者) は——一人一人の者を数えあげてごらんなさい——あなたの一族には誰もい
ません。)(類例: IV. 4, 23)

I. 9, 22においては, “zel iz al bi manne” という文からもわかるように,
“思い出す” 行為は, 過去ではなく, 現在から未来にかけて起こるものであるこ

Otfrid の福音書における主文の“現在形+副文の接続法過去形”の形式についてとがわかる。そこで、接続法過去形 *gihogeti* は脚韻 (*gihogeti: habeti*) の影響によって現われたと考えられる。Ⅳ. 4, 23は構文的にⅠ. 9, 22と全く同じであり、Ⅳ. 4, 23と同じことが言える。

- ③ *Nist, ther widar herie/so hereron sinan werie, ther ungisaro in noti/so baldlichō dati; ther ana scilt inti ana sper/so fram firliafi in thaz giwer, (Ⅳ. 17, 7)*

(兵士達に対して、そのように自分の主人を守る者はいない、また、武器を持たずに実際そのように勇敢にふるまった者はいない、また、盾も槍も持たずにそのように戦いの渦の中へ入って行った者はいない。)

Ⅳ. 17, 7では、脚韻の位置にある接続法現在形 *werie* と並んで、2行目に脚韻の位置にある接続法過去形 *dati* が現われるが、3行目の行中にある接続法過去形 *firliafi* の存在により、2行目の *dati* は脚韻に影響されない本来のものであることがわかる。1行目の *werie* は脚韻 (*herie: werie*) によるか、あるいは、時を超えた一般的な事柄を表わす現在形と考えられる。

- ④ *Nist man nihein in worolti, thaz saman al irsagetī, wio manag wuntar wurti zi theru druhtines giburti. (Ⅰ. 17, 1)*

(主の誕生に際して、いかに多くの奇跡が生じたかを、すべて語り尽くす者は世の中にいない。)(類例: Ⅴ. 23, 19)

Ⅰ. 17, 1に対しては、例えば、“*Nist man, thoh er wolle,/ther thaz gifuari irzelle, (Ⅴ. 23, 127)*

(たとえ望んでも、その心地よさを語り尽くす者はいない。)”のような、接続法現在形が現われる文も存在し、また、Ⅰ. 17, 1では、“語り尽くす”行為は過去に限らず、これからもあり得ないということが述べられている。そこで、接続

Otfrid の福音書における“主文の現在形+副文の接続法過去形”の形式について法過去形 *irsageti* は脚韻 (*worolti: irsageti*) の影響によって現われたと考えられる。

V. 23, 19は構文的に I. 17, 1と全く同じであり, I. 17, 1と同じことが言える。

24) *that....., thaz* (狭義の名詞文⁽²¹⁾)

(用例: I. 1, 116; I. 27, 54; III. 20, 9; V. 20, 87)

① */thaz ist thoh arunti min, thaz ih iu gizalti, /waz er hera wolti.* (I. 27, 54)

(彼がこの世に向かって何を望んだかということをおあなた方に語るものがししながら私の役目である。)

I. 27, 53は, J. 1, 25 に対する Otfrid の挿入で, 聖書の対応は存在しないが, 私 (=ヨハネ) の語る行為は明らかに現在から未来に向かっており, 接続法過去形 *gizalti* は脚韻 (*gizalti: wolti*) の影響によって現われたと考えられる。

② */wio mag werdan thaz io war, Thaz quami uns in gidrahti, /thih thuungin unmahti,* (V. 20, 87)

(病気があなたを圧迫しているということが我々の思いに及んだということが, 実際どうしてあり得ましょう?)

V. 20, 87かには, 厳密ではないが, 聖書の対応 “*domine, quando vidimus te.....infirmum* (Mt. 25, 37) (主よ! あなたが病気であることを, いつ我々が見ましたか?)” が存在し, また, *quami* は行中に位置している。そこで, 接続法過去形 *quami* は過去時称の意味を持つと考えられる。

③ *Ni sint theso unmahti, /thaz er iz firworahti,* (III. 20, 9)

Otfrid の福音書における“主文の現在形+副文の接続法過去形”の形式について
(この病気は、彼が自分で引き起こしたものではない。)

Ⅲ. 20, 9の *thaz* 以下には、聖書の対応“*neque hic peccavit* (J. 9, 3) (この者が罪を犯したのでもなくが存在し、接続法過去形 *firworahti* は過去時称の意味を持つと考えられる。

④ *Thaz sie ni wesen eino/thes selben adeilo, ni man in iro gizungi/kristes lob sungi*; (I. 1, 116)

(彼らだけが、人が彼らの言葉でキリストの賛美を歌うことに、関与しないことがないように。)

I. 1, 116は、Otfrid がなぜドイツ語で福音書を書くかという理由を示した文であるが、人々が彼の福音書を朗読する行為は、彼が書く時点からみて未来のことであり、接続法過去形 *sungi* は脚韻 (*gizungi: sungi*) の影響によって現われたと考えられる。

25) 間接疑問文 (狭義の意味における)

(用例: Ⅲ. 20, 91; V. 1, 2; V. 12, 9)

① *Nist kund uns thaz girati, /wer thiougun imo indati*; (Ⅲ. 20, 91)
(誰が彼の目を開いたのか、我々は知りません。)

Ⅲ. 20, 91には、聖書の対応“*quis ejus aperuit oculos, nos nescimus*; (J. 9, 21) (誰が彼の目を開いたのか、我々は知りません。)”が存在し、接続法過去形 *indati* は過去時称の意味を持つと考えられる。

② *Ist filu manno wuntar, /ziu druhtin hiar in woralti/thes kruzes tod irweliti* (V. 1, 2)

Otfrid の福音書における“主文の現在形+副文の接続法過去形”の形式について
(主がこの世でなぜ十字架の死を選んだかということは、多くの人々にとり不思議である。)

V. 1, 2 には、聖書の対応は存在しないが、V. 1, 2 の元になる Alcuin の“videndum est, quare dominus tale genus mortis *elegerit* (de divinis officiis XVIII) (主がなぜそのような種類の死を選択したかを、考えなければならない。)”という対応が存在し、接続法過去形 *irweliti* は過去時称の意味を持つと考えられる。

③ Ist thaz selba mari/harto seltsani, harto rumo oba unsan wan/sulih
racha gidan: In welicha wisun *wurti*,/ther man was in giburti
.....

Wio er selbo *quami*/

bisparten duron thara zi in/(V. 12, 9)

(人間として生まれた彼が、閉じられた戸から彼らのところへやって来たということがどのようにして起こったかということは非常に不思議であり、我々の想像をはるかに超えたところで行なわれている。)

V. 12, 9には、聖書の対応は存在しないが、V. 12, 9の元になる Gregorius の“quomodo post resurrectionem corpus dominicum verum *fuit*, quod clausis januis ad discipulos ingredi *potuit*? (homil. 26)

(閉じた戸から弟子達のところへやって来ることのできた主の体は、復活の後にどのようにして真のものになったのか?)”という対応が存在し、接続法過去形 *wurti*, *quami* は過去時称の意味を持つと考えられる。

上述の結果、次の25例において、接続法過去形は脚韻の影響によって現われたと考えられる⁽²²⁾。

Otfrid の福音書における“主文の現在形+副文の接続法過去形”の形式について

I. 1, 22 (kurti: wurti); I. 1, 116 (gizungi: sungi); I. 3, 16(mari: wari); I. 9~ 22 (gihogeti: habeti); I. 17, 1 (worolti: irsageti); I. 19, 23 (mari: wari); I. 27, 38 (gizaltin: santin); I. 27, 54 (gizalti: wolti); II. 2, 37 (ensti: giwunsgti); II. 4, 41 (wolti: skolti); II. 9, 75(alawari: wari); II. 13, 28 (lutmari: wari); II. 18, 11 (giwuagi: sluagi); III. 3, 1 (ungizami: firnami); III. 6, 18 (gisazi: gazi); III. 16, 60 (gizami: quami); III. 17, 18 (girati: quati); III. 20, 55 (mari: wari); III. 24, 36 (gizami: quami); III. 25, 19 (notin: datin); IV. 4, 23 (gihogeti: worolti); V. 20, 102 (noti: dati); V. 23, 19 (worolti: irsageti); V. 25, 101 (ensti: gionsti); H. 27 (alathrati: dati)

古高ドイツ語の接続法過去形は、一人称三人称・単数形で、強変化動詞が -i, 弱変化動詞が -ti の語尾を持つ。そこで、接続法過去形は、強変化動詞では mari (I. 3, 16; II. 13, 28; III. 20, 55), wari (II. 9, 75), (un)gizami (III. 3, 1; III. 16, 60; III. 24, 36) のような形容詞と、弱変化動詞では ensti (II. 2, 37; V. 25, 101), worolti (I. 17, 1; IV. 4, 23; V. 23, 19) のような名詞とともに、脚韻の位置に現われることがわかる。

また、過去時称の意味を持つ接続法過去形の脚韻上の影響によって、接続法過去形が現われる例も存在する。(I. 9, 22; I, 27, 38; I. 27, 54)

このように、接続法過去形は、脚韻の位置で非常に合理的に使用されており、Otfrid はこれらを詩的な自由として使用していたと考えられる。

また、以上のことから、例えば “Firnim in alawari, thaz got ther fater wari, joh thaz kind eino kristan bizeino; (II. 9, 75)” の文における wari を “Vernimm, daß Got der Vater war und daß das Kind nur Christus bedeutet⁽²³⁾.” のように過去 war 形で訳すのは誤りであり、bizeino と共に、現在形で訳さなければならないことがわかる。

Otfrid の福音書における“主文の現在形+副文の接続法過去形”の形式について

〈注〉

- (1) Otfrid の福音書では、異説はあるが、各行が前半行と後半行に分かれ、お互いに脚韻をふむことが一般に認められている。

本稿では、前半行と後半行を斜線によって区切った。

Hoffmann, Werner: *Altdeutsche Metrik*, Stuttgart 1967, p. 29.

- (2) Erdmann, Oskar: *Untersuchungen über die Syntax der Sprache Otfrids*, Halle 1874, p. 28.

- (3) Behaghel は、*Heliand* の“*unâniu, that ina ûs gegnungo god fon himila selbo sendi* (213) (彼を神自身が天から我々に対して送った、と思う。)”という文を例にとり、本来過去時称の意味を持たない接続法過去形は、過去時称の意味で副文に現われることはできず、*uuâniu: ina god senda* のような、後続の文に直説法過去形の現われる形式が、上の文の元として考えられなければならないとしている。また彼は、この形式が、“*quiðit that he Crist sí, (5191)* (彼は自分がキリストであると言う。)”のような、副文に接続法現在形が現われる文との類推により、直説法過去形の代わりに接続法過去形を示すに至ったと述べている。

Behaghel, Otto: *Deutsche Syntax Bd III.*, Heidelberg 1928, p. 682.

- (4) Behaghel, Otto: *ibid.*, p. 682.
- (5) Nemitz, Werner: *Zur Erklärung der sprachlichen Verstöße Otfrids von Weissenburg*. PBB (1962) p. 426.
- (6) 主文の動詞の種類によって、副文に現われる動詞の法が決まっているという理由から、主文の動詞を次の三つのグループに分類した。I. “思う、尋ねる”のような話者の主観を表わす動詞、II. “知る、知覚する、”告知するなど客観的事柄を表わす動詞、III. “言う”など伝達を表わす動詞。動詞の法に関して言えば、Iの動詞が現われる主文に続く副文には接続法、IIには直説法、IIIには *sagên* を除いて接続法が現われることが普通である。

Holthausen, Ferdinand: *Altsächsisches Elementarbuch*, Heidelberg 1921, p. 194.

- (7) 接続法現在形・過去形は、本来は時の差ではなく、現実に対する話者の心理的な距離の違い（接続法過去形は現実に対するより大きい隔たりを表わす）を示していたが、上述の“*uuâniu, that ina ûs god.....sendi (Heliand. 213)*”のように、過去の出来事を表わすためにも用いられている。そこで過去時称の意味を持つという表現を用いた。

Dal, Ingerid: *Kurze deutsche Syntax*, Tübingen 1966, p. 137.

- (8) 本稿では次のような略号が用いられている。Mt=マタイ、L=ルカ、J=ヨハネ；S=Salomon への献辞、H=Hartmuat, Uuerinbert への献辞。
- (9) もちろん、Otfrid が聖書をそのまま翻訳し、その間に自分の考えを付け加えたわけではないが、Otfrid の福音書における構造的な多重性、つまり、I. 聖書に基づくもの、

Otfrid の福音書における“主文の現在形+副文の接続法過去形”の形式について

II. カロリング朝の神学思想を代表する Beda, Alcuin, Hrabanus Maurus などの著作に基づくもの、III. Otfrid 自身の考え、を考慮に入れ、このような表現を用いた。

Michel, Paul; Schwarz, Alexander: *unz in obanentig*, Bonn 1978, p. 18.

(10) 副文が、間接疑問文か、*thaz* によって導かれるかによって、動詞の法の現われ方は異なるが、Heliand の “*linodun, huô sie lof scoldin uuirkean* (810) (彼らがいかに神の賞讃を行なうべきか学んでいた。)” のような対応より、*lernên* を I のグループに分類した。

Holthausen, Ferdinand: *idid.*, p. 193.

(11) *findan* に続く副文では直説法が普通であるが、主文が否定文の場合、接続法が現われる。

Erdmann, Oskar: *ibid.*, p. 189.

(12) Erdmann は、II. 4, 41, H. 27 においては、客観的な事実の認識ではなく、主観的な認識が問題となっているので、接続法が現われる理由があるとしているが、H. 27 の二行目での直説法過去形 *rihta* への移行、あるいは “*Nim nu gouma harto, wialicha unredina er zi imo sprah hiar obana.* (II. 4,70) (彼(サタン)が彼に上でどのような誤った事を語ったかに注意しなさい!)” のような文より、II. 4, 41, H. 27 の接続法過去形は脚韻の影響によって現われたと考えた方が良いと思われる。

Erdmann, Oskar: *ibid.* p. 189.

(13) *lesan* に続く副文では直説法が普通(用例: II. 3, 29; II. 7, 75; II. 9, 71; III. 13, 46, 48; III. 14, 4; III. 14, 65; IV. 6, 33; V. 19, 23; V. 19, 31) であるが、主文が *maht lesan* の例は II. 3, 29 しかなく、しかも、接続法の置われる H. 44 では、それを直説法に変えても、(*zeinta: irdeilta*) となり脚韻上全く支障がない。そこで II. 3, 11; IV. 6, 4; H. 44 の接続法については確かなことを言うことができない。

(14) この接続法に関しては、Heliand においても “*hiet thuo.....scriban, that uuâri cuning Iudeono, (5551)* (彼は、それがユダヤ人の王である、と書くように命じた。)” のように接続法が現われることから、脚韻の影響によるものではなく、本来のものであると思われる。

(15) 接続法過去形 *santin* はラテン語の *miserunt* との対応より、過去時称の意味を持つことがわかる。また、このような、副文に続く副文では、先行する副文に接続法が現われる場合、それに倣って後続する副文においても接続法が現われるため、その出現の理由を考慮することはしていない。

Behaghel, Otto: *ibid.*, p. 677.

(16) 接続法現在形では *gisizze: giezze* のように語の一部でしか韻がふめないで、*Vollreim* のために接続法過去形が現われたと考えられる。

(17) 例(中高ドイツ語) *die bluomen uz dem grase dringent, same sie lachen.* (Walter)

Otfrid の福音書における“主文の現在形+副文の接続法過去形”の形式について

(花々は、まるで笑っているかのように、草から顔を出している。)

Dal, Ingerid: *ibid.*, p. 147.

(18) Erdmann, Oskar: *ibid.*, p. 113.

また、Erdmann は III. 3, 1 の so 以下に関して、接続法過去形 *firnam* は、控え目な仮定を表わしているとも解釈できる、と述べている。

Erdmann, Oskar: *ibid.*, p. 23.

(19) これに対して、①と③においては、①では主文に *al* “あらゆる” という形容詞が現われ、③では主文が否定文ということから、接続法が現われる理由が存在する。

Erdmann, Oskar: *ibid.*, p. 135.

(20) これは、形式的には、(21)③と似ているが、意味的には異なるものである。

(21) 主文における、先行する代名詞 *thaz* にかかる副文を狭義の意味での名詞文として区別した。(24)の間接疑問文についても同様である。

また、(23)③、④においては、副文が主文の代名詞 *thaz* の斜格、つまり主格以外の格にかかると考えられるため、ここに分類した。

Erdmann, Oskar: *ibid.*, p. 139.

なお、(23)③を Erdmann は結果文と解釈している。

Erdmann, Oskar: *Otfrids Evangelienbuch*, Halle 1882, p. 430.

(22) この中で、I. 19, 23; II. 4, 41; III. 20, 55; III. 24, 36; V. 20, 102; V. 25, 101は、直説法過去形の代わりに用いられた接続過去形の例である。

(23) Michel, Paul; Schwarz, Alexander: *ibid.*, p. 117.

<参考文献>

Behaghel, Otto: *Deutsche Syntax Bd III.*, Heidelberg 1928.

Dal, Ingerid: *Kurze deutsche Syntax*, Tübingen 1966.

Erdmann, Oskar: *Otfrids Evangelienbuch*, Halle 1882.

——: *Untersuchungen über die Syntax der Sprache Otfrids*, Hildesheim 1973.

Hoffmann, Werner: *Altdeutsche Metrik*, Stuttgart 1967.

Holthausen, Ferdinand: *Altsächsisches Elementarbuch*, Heidelberg 1921.

Michel, Paul; Schwarz, Alexander: *unz in obanentig*, Bonn 1978.

Nemitz, Werner: *Zur Erklärung der sprachlichen Verstöße Otfrids von Weißenburg*, PBB (1962).